

イエスの祈り（その一）

『シェモネー・エズレー』にも『カディシュ』にもない要素とはどうでしょう※。それが、『私たちに必要なパンを今日私たちにお与えください』と、『私たちを試みに会わせないでください』です。ここには、イエスも含めた現実の状況、つまり物質的困窮とか人々の心の脆弱さ、それに対する想いがこの二句の中に読みこまれていると思われまふ。・・・その中にはすくいあげられないところの、当時の状況の中で苦しみつつも生きていこうとしている人々の、神への真摯な訴え、それが『私たちに必要な糧を』ということばと、『どうか試みに会わせないでください』という率直な文の中に現われていると思ひます。

イエスの祈りが『行動的祈り』であるというのは、イエスの活動の仕方が、そのままで神とのレスポンスだということです。つまり、行動というものを土台にしている祈り、あるいは祈りが行動という形で自然表出する、そういうダイナミックなものだということ強調したものです。つまり、非常に静かに、どこかに入って長く祈ってだけいる、そういうたたずまいではないということです。・・・

福音書にはイエスが一人で祈っていたという箇所が、何度も出てきます。・・・たとえば、マルコ1・35などで、イエスは朝方まで祈っています。こういうふうに長い祈りというのは、そんなにことばをたくさん使って祈りうるものではないと思うのです。ではどうやったら朝まで祈れるのでしょうか。イエス自身が、『祈るときにペラペラ言うな』（マタイ6・7）と諭したと言われています。つまり、こういう祈りというのはことばを超えた祈りだと思ひます。イエスが『お父さん（アッパ）』と呼んだその神の原存在の中にただ身を明け放つ、あるいは、その原存在をただ聴く、というだけの祈り。非常に深い、時間すら消滅している神秘的な祈りではないかと私は思うのです。

これがイエスの、たいへん行動的でダイナミックで、人から見たらとんでもない醜聞だと思ひようなことを起こしていく行動力の源泉だと思ひます。あるいは、そういう異様なほどの行動性が、もう一面でこうした極限的な静謐さの中に沈潜した面を有しているのです。そして、この二つは矛盾ではないと思ひます。神の原存在しかない世界での深い祈念が、他方、激しい行動力となって昇華するのでしょうか。

逆に、こういう神秘的祈りがないと、祈りそのものが枯渇した内実のものとなりますし、行動のエネルギーすらも、お定まりのものしか出てこないのではないかと思ひます。」

※『シェモネー・エズレー』は、イエスの時代のユダヤ人にとって非常に基本的な祈りで、日に三度唱えるべしと言われていた。『カディシュ』は、シナゴグ（会堂）などでの礼拝の終りの頌栄、神をたたえることば。イエスが教えた「主の祈り」と比較している。

（「イエスの信仰生活」佐藤 研 「キリスト教の神学と霊性」（サンパウロ）から）

